

「世界の教科書展」で育む異言語・異文化へのまなざし ーグローバル・スタディーズとの関連から考えるー

山 川 智 子
(文教大学文学部)

An Eye to Foreign Languages and Cultures at 'Exhibition of Textbooks in the World':
Consideration in Relation to Global Studies

YAMAKAWA TOMOKO
(Faculty of Literature, Bunkyo University)

要 旨

文教大学教育研究所主催による「世界の教科書展」では、これまで様々な国と地域の教科書が展示されてきた。会場では、教科書の他、地域事情、教育制度等もパネルで紹介される。さらに、デジタル教材を活用した展示やレクチャーも行われる。来場者は、会場で教科書を実際に手に取ることができる。さらに、一部分が日本語に翻訳されたページがパネル展示されるので、教科書の内容も把握できる。様々な国や地域の教科書に実際に触れることで、来場者の異言語・異文化への関心が喚起されることが期待される。本稿では、第23回教科書展「〈特集〉ドイツの教科書」において、パネル原稿執筆、教科書の翻訳、レクチャーを担当した筆者の経験から、教科書を通じて異言語・異文化理解へのまなざしが育まれる可能性を示し、今後の研究教育活動につなげたい。

1. はじめに

次世代を担う子どもの教育を考えることは、グローバル化が進み、世界情勢が変化しても変わることのない重要課題である。その教育を映し出す教科書は貴重な資料である。教科書は、学校教育の現場で主たる教材として位置づけられており、子どもの学びに重要な役割を担っている。また教科書には、その国や地域の歴史が記されており、それらを読み解くことで、子どもたちに託したい未来の姿を思い描くことができる。

「世界の教科書展」では、日本ではそれほど知られていない国や地域も積極的にとりあげ、教科書を展示している。展示の際には、会場の壁を埋め尽くすパネルも用意される。パネルでは、テーマとなる国や地域の事情、周辺地域の状況、教育制度、さらに教科書の内容が解説される。興味関心も様々な来

場者に対して、分かりやすい展示を心がけている。教育環境が整っているとは言えない国や地域を取り上げた回では、通常の解説の他に、その環境で子どもたちがどのように勉強しているかも紹介した¹⁾。来場者一人ひとりが、日本の教育や自身が受けた教育と比較できるよう、展示スペースを広くとり、語らいの場を設けるなど、心地よい雰囲気をつくる工夫もしている。大人はもちろんのこと、未来を担う子どもも世界の〈いま〉を体感することが教科書展の目的のひとつだからである。

2. 第23回 世界の教科書展

「〈特集〉ドイツの教科書」に際して

2.1. 教科書展の概要

文教大学教育研究所の主催による「世界の教科書展²⁾」は、1994年の「第1回 世界の教科書展」以来、原則として毎年、越谷キャ

ンパスの学園祭（藍蓼祭）で開催されている。

ドイツの教科書が展示された「第23回世界の教科書展」³⁾は、2016年10月28日（金）から30日（日）まで開催され、3日間で約300名の来場があった。

開催に向け、109冊（初等教育用60冊、中等教育用49冊）の教科書を収集した。国語（11冊）、算数・数学（12冊）、社会（19冊）、理科（6冊）、英語（25冊）を含む、初等教育全科目、および中等教育の主要科目の教科書である。予算の都合上、初等教育の教科書を優先し収集している。

2016年度からの試みのひとつは、事前収録されたインタビュー動画の入ったiPadを会場に設置し、来場者が気軽に閲覧できるようにしたことである。（インタビューは、レクチャー担当者が教育研究所スタッフからの質問に答える形式で進められた。）現代の教育手法として注目されるiPadの活用は、教科書展そのものの歴史と伝統を維持し、次世代になく可能性のひとつと考えている。

実は、ドイツの教科書が展示されたのは、この年が初めてではない。2002年度の第9回世界の教科書展「〈特集〉歴史の教科書」においても、各国の戦後処理を比較するため、ドイツも取り上げられたことがある⁴⁾。この回では、韓国、中国、日本、ドイツの4か国の歴史教科書が取り上げられた。それぞれの国が、歴史的事実にどう向き合っているかが注目された企画であった。展示のポイントは、①「歴史的事実」とされていることをどのように証明しているか②記述における執筆者の主観ないし「情意性」が過多になってはいないか、というものであった。これらの国々の歴史教科書の記述方法の相違や、歴史教科書の望ましい在り方等について議論する企画となった。ドイツの教育を考える上で、歴史教育を抜きにはできない。ドイツは次世代に歴史を語り継ぐことを文化として認識し、それを「記憶文化・想起の文化

(Erinnerungskultur)」という概念で表現している。学校教育においても現代史に重点が置かれている。そこで、2016年の第23回教科書展でも、ドイツの歴史教育に重点をあてた。

2016年度からのもうひとつの試みとして、学園祭終了後に学外での巡回展「〈世界の教科書〉巡回展」も行っている⁵⁾。その年の学園祭に展示した教科書やパネルを学外の会場まで運搬し、展示するという手作りの展覧会である。教育研究所の教科書コレクションを一般の人々に広く公開し、地域の方たちとの交流も深めるためである。丸善雄松堂株式会社教育・環境ソリューション事業部との共催事業として、OKEGAWA honプラス（桶川）⁶⁾を会場にし、開催している。

2016年度の学外巡回展は、2016年12月10日（土）から17日（土）までの期間に行われた。8日間で、約1100名の来場があった。第1回目を記念し、世界15か国（中国・韓国・シンガポール・イギリス・マレーシア・オーストラリア・タイ・スペイン・インドネシア・フィンランド・ロシア・ブラジル・インド・トルコ・ドイツ）の教科書、約1500冊が展示された。

2.2. 教科書展会場で

教科書展期間中の2016年10月29日（土）、筆者は会場にて「ドイツの教育の今」というテーマでレクチャーを行った。約20名の参加があった。レクチャーではまず、展示パネルの内容を発展させ、ドイツの教育制度の特徴（進路決定の時期、複線型の中等教育制度等）や歴史教育の現状を話した。さらに一般の人々の関心が高いドイツの英語教育の現状と、日本との相違に関して説明した。教科書展の会場で行うことができたので、教科書の該当ページや、解説パネルを活用でき、伝わりやすいレクチャーにすることができた。

会場には、事前収録したインタビューが3台のiPadに収められ、展示された。収録され

た内容は次のようなものである。

- ①ドイツの教育の特徴
- ②日本とドイツの教育制度の違い
- ③ドイツが教育を州で統括する理由
- ④ヨーロッパにおけるドイツの教育の位置付け
- ⑤職人になるための教育
- ⑥大学への道と大学教育
- ⑦ドイツの教育の今

項目ごとにiPadでアイコンが設定されたので、一番関心のある項目をクリックすればピンポイントで視聴できる工夫も凝らされた。事前インタビューの公開によって、レクチャーを聴き逃した方たちに、教科書展の概要を伝えることができた。ITの活用が企画内容を広める一つの手段となった。

2.3. 来場者の声

来場者から寄せられたアンケートの集計は、一人ひとりの声の集大成である。この考え方は、「複言語・複文化主義」という現代ヨーロッパの言語教育政策の鍵概念とも通じるものである⁷⁾。

「複言語・複文化主義」は、「多言語・多文化主義」とは異なる考え方として欧州評議会が提唱した概念である。欧州評議会は、「複言語・複文化」な個人が集まったところに「多言語・多文化」社会ができると考える。つまり、「複言語・複文化主義」は、一人ひとりに焦点をあて、その個人の言語の学習過程に問題意識を持ち、獲得した知識が自身の中で融合されることを一人ひとりに意識させる。そのことで、言語能力が複合的なものであり、多面的な要素を考慮に入れる重要性を認識できる。自身の多面性にも気づき、他者に対する想像力が研ぎ澄まされるのだ。

「複言語・複文化主義」という考え方からは、一般論でまとめるのではなく、個々の現場を直視し、自分なりの問題点を見つけるこ

との重要性を教えてくれる。それぞれの声の集まったところに、その教科書展の全体像が出来上がってくると考えられないだろうか。

以下、アンケート結果の一部を紹介する。

- ドイツと日本の違いを教科書だけでも感じます。「歴史と今」、この姿勢は見逃してはならないと思います。
- 日本とドイツの教科書の違いを見ることができました。ドイツの教科書の方が文字数が多く、考えること（課題など）が多い気がします。算数（1年生）も、数の概念形成のためにやっていることが日本とは少し違って、ドイツ方式のほうが子どももすんなり理解できるのでは？と考えさせられました。
- ドイツの教育が複線型であり、10歳以降は自らの進むべき道がある程度見すえて進路を決めていく点や、職業教育、職人への道も一つの道としてメジャーであることが日本とは違うと思った。
- 歴史的な点もふまえてドイツの教育について学ぶことができたのはよかった。

教科書展の来場者からの一つひとつの声に耳を傾けることの意義も、ヨーロッパの言語教育政策の理念が教えてくれる。

3. 教科書を通して考える地域の教育事情

本節では、教育研究所がこれまで地域の人々に対して世界各地の事情をどのように紹介してきたかを、ドイツの教科書が展示された2016年度の第23回教科書展の例を通して振り返る。そこで、教科書展の内容を、ドイツの教科書、および展示パネルで解説した内容（地域事情、教育制度、教科書の内容）の一部とともに紹介したい⁸⁾。

3.1. 教育における地方分権

ドイツの正式名称は「ドイツ連邦共和国 (Bundesrepublik Deutschland)」である。西

ヨーロッパ中央に位置し、16州から成る連邦制国家である。ヨーロッパにおける経済的、政治的な主要国の1つで、その存在感は大きい。世界各国で自国優先主義が叫ばれる現代において、隣国との協調やEUの意義と役割を認識した上で外交を行う努力をしている。

グローバル化が進んだ現代、自国の教育が世界の中でどの位置にあるかに関して、各国の関心になっている。ドイツも例外ではない。「経済協力開発機構 (Organisation for Economic Co-operation and Development: OECD)」が実施する「学習到達度調査 (Programme for International Student Assessment: PISA)⁹⁾」の結果は、「PISAショック」と言われるほど、2000年代初頭のドイツの教育界に大きな衝撃を与えた。このことは、自国の教育が対外的にどのように評価されるのかを考慮しなければならない現代において大きな課題である。

PISAの結果は、ドイツの学校に在籍する移民の子どもたちの人数が増えるにつれ、学力格差が広がったこと、それがドイツ全体の教育として出される数値に大きく反映したことが原因とされている。教育の多様性を特徴としながらも、格差が広がることに起因する国際競争力低下を抑えるためには、どのような教育政策が求められるのか。これを考えるには、政府関係者等の上層部の議論に任せるだけでなく、個々の現場の状況を把握し、当事者たちの声に耳を傾け続ける必要がある。柔軟な対応が求められる教育現場の実態を見る一つの手段となるのが、教科書である。

ドイツは地方分権体制の歴史が長く、現在でも教育政策や教育課程・教育内容は、国ではなく、州の管轄下にある。これが、多文化主義を掲げるドイツの特徴のひとつである。特に、初等教育と中等教育においては「教育連邦主義」のもと、各州に設置されている日本で言うところの「文部省」に権限が与えられている。とはいえ、ドイツという国の教

育を対外的に示していくためには、ある程度の緩やかな統一基準を持つことも必要である。そのため、16州の「文部省」の中で連携をとるため、「常設各州文部大臣会議 (Ständige Konferenz der Kultusminister der Länder: KMK)」が設置され、この会議で調整が図られる。

このように州に大きな権限が与えられている背景には、「文化高権 (Kulturhoheit)」という仕組みがある。「文化高権」は、ドイツの教育を語る時に注目すべき要素である。「文化高権」とは、文化政策と文化行政のすべての問題に関して、原則として諸州が立法上および行政上の権限を有する、という仕組みである。権限は、ラジオ、国立の図書館、劇場、学校や大学に至るまで及んでいる¹⁰⁾。

かつて、旧西ドイツでの「常設各州文部大臣会議」で締結された「デュッセルドルフ協定」(1955年)において、諸州の学校教育政策の統一化が図られたこともあった。たとえば言語教育においても、「第1外国語」は原則として「英語」と決定された。しかし、1957年にフランスとの関係が強いザールラント州が連邦に編入され、フランス語の存在感が増し、この協定も柔軟化した¹¹⁾。このように、連邦レベルで調整を図りつつも、カリキュラムの決定は州に任されている。教育政策が州の「文化高権」を尊重した例であると言える。このように、「常設各州文部大臣会議」での緩やかなつながりが保たれつつ、州ごとに独自の政策が決定されてゆくのが、ドイツの教育の特徴である。

難民の受け入れに積極的な姿勢をとるドイツの教育現場は、現在、複数の課題を抱えている。様々な背景を持つ子どもたちのいる学校では、多文化主義をめざしながらも、学力格差等、新たな課題に直面しているのだ。このような状況でもドイツが難民を受け入れた背景には、「過去の克服」という歴史認識の課題もあることは押さえておきたい点である。

3.2. 「複線型」の教育制度

同じ敗戦国でも日本とドイツの歩みは異なっていた。アメリカというひとつの国に占領された日本と異なり、ドイツは、アメリカ、イギリス、フランス、ソ連邦の4つの連合国による分割統治を受けた。戦勝国の占領政策もそれぞれ異なった。日本に対しては、6-3-3-4制の「単線的」な教育制度を導入した。旧西ドイツは、アメリカ的な「単線的」教育制度の導入に抵抗した。その結果、それぞれの州が戦前からの複数（原則3種類）の、「複線的」教育制度を保持することになった。

教育課程は、次のように大きく4つの段階に分けられる。具体的には、①第1学年から第4学年までの「初等教育¹²⁾」②第5学年から第9学年あるいは第10学年までの「中等教育Ⅰ」③第10学年（または第11学年）から第12学年（または第13学年¹³⁾）までの「中等教育Ⅱ」④それ以降の「高等教育」という段階である。以下、それぞれの段階においてどのような教育が行われているかを概観する。

①初等教育

日本でいう小学校は、ドイツでは「基礎学校 (Grundschule)」と呼ばれている。新年度は8月1日からはじまる。原則として、その年の9月30日に満6歳に達した子供が対象となるが、その年の12月31日までに満6歳になる場合には、親が申請し、学校が認めれば、入学することもできる。

「基礎学校」(多くの州では、6歳から10歳までの4年間)を修了した子どもたちは「複線型」の中等教育課程に進む。ドイツの義務教育は原則9年(州によっては10年)なので、初等教育4年間と中等教育のはじめの5年間(州によっては6年)が義務教育期間になる。

②中等教育Ⅰ

中等教育は、5年制の「基幹学校

(Hauptschule)」、6年制の「実科学校 (Realschule)」、8年制(または9年制)の「ギムナジウム (Gymnasium)」という多様な学校種がある。それぞれのカリキュラムで将来の職業に結びつく教育が体系的に行われている。州によっては「総合制学校 (Gesamtschule)」もある。こうした中等教育における3分岐型(総合制学校を含めると4分岐型)学校制度が、ドイツの教育に根付いている。

子どもたちの進路も様々である。基幹学校の卒業生は、職業訓練を受けた後に職人になるか、単純労働に携わることが多いとされている。実科学校の卒業生は、全日制の職業学校で学ぶか、職業訓練を受け、公務員や技術者になるのが一般的である。アビトゥアに合格したギムナジウムの卒業生は、大学に進学して高等教育を受けることができる。ギムナジウムの最終段階、つまり「中等教育Ⅱ」の段階では、いわゆる「リベラルアーツ教育」を受けることになる。日本の大学の教養課程の学業に匹敵するような教育を受けるわけである。

ヨーロッパの多くの国の事情にあわせ、ギムナジウムは、徐々に「9年制」から「8年制」へと短縮化(「G9」から「G8」へ)された。その後、この短縮化によって新たな課題も生じ、州によって8年制か9年制かを選択できるようになっている¹⁴⁾。

③「中等教育Ⅱ」

この段階のドイツの教育で特徴的なものの一つに、伝統的な職業教育がある。基幹学校と実科学校の卒業生が主に受ける教育である。全日制の職業学校のほかにも、「二元制度 (duales System)」と呼ばれる企業内訓練、あるいは、定時制職業学校での訓練があり、自らの職業に関する専門知識や教養理論を学ぶ制度がある。

訓練終了後に資格を得ることができ、それ

により、社会において一定の地位を占めることが可能となる。学校教育と職業教育の両方を組み合わせるこの「二元制度」により、複合的な知識をつけ、実践力をともなったより高い専門性を目指すことができる。

④高等教育

ギムナジウム卒業試験（アビトゥア）に合格した生徒は、原則として、すべての大学に進むことができる¹⁵⁾。とはいえ、大学進学率が高まり、特定の分野では定員上、入学制限がかかることもあり、その際にはアビトゥアの成績が参考にされる。大学は大きく分けて、総合大学、専門大学、芸術大学、映像大学、音楽大学などがある。取得できる修了資格は、大学や専門によって異なる。

グローバル化に伴い、制度を共通化しようという世界的な流れの中で、ドイツの大学も変革の時期を迎えている。独自性を保ってきたドイツの教育制度も、高等教育でのヨーロッパ統一基準を示した「ボローニャ宣言」の影響を受けている。ドイツの大学でも、これまでの「マギスター」という資格を廃止し、「バッチェラー」や「マスター」の資格を導入した。ギムナジウムの修了年次を1年短縮しようとしたのも、より早い段階でドイツの若者に高等教育を受けさせるためである。このような制度変更のため、ギムナジウムでしっかりとした教育を行うことが難しくなっている。様々な教育内容の見直しが迫られ、課題が累積しているのが実情である。

3.3. 教科書の内容

教育が地方分権で州の管轄下にあるので、教科書の選択基準も州に一任されている。中等教育段階では、ギムナジウム、実科学校、基幹学校、州によっては総合制学校という学校種にあわせた教科書が選択される。州、そして学校種ごとに選択が行われるので、教科書の種類は豊富である。

教科書の使用方法も日本と大きく異なり、リサイクルが基本になっている。学期のはじめに、先輩が使用した教科書が子どもたちに配布される。表紙の裏には、それまで借りた生徒の名前、クラス、年度が書かれている小さな紙が貼られていることが多い。生徒は、学期中、教科書を汚さないようカバーをかけるなどして大切に使い、学期末に学校に返却する。

以下、ドイツ語、算数、歴史の教科書を簡単に紹介していく。

①ドイツ語 (*deutsch.punkt 1*)

4年間の初等教育を終え、中等教育を受け始める子どもたち向けのドイツ語教育のための教科書である。ドイツ語を母語としない、移民の背景を持つ子どもたちも多数在籍するドイツの学校では、ドイツ語教育は重要である。もちろん、ドイツ語を母語とする子どもたちにとっても重要な科目である。ドイツ語教育では、言語を用いた対人コミュニケーションの訓練が行われていることは、三森ゆりかの研究に詳しい。

新しい学校生活に慣れ、友人を作るには、気持ちよくコミュニケーションをとっていく必要があり、そのための工夫が導入部分に見られる。また、新生活について、かつての旧友（基礎学校〈日本で言う小学校〉の友人）へ便りを送る、という設定で、手紙やメールの書き方を学ぶ工夫がなされている¹⁶⁾。

②算数 (*Super M I Mathematik für alle*)

1993年に発効したマーストリヒト条約により通貨統合が行われ、ドイツもその中に入った。ドイツにとって、経済復興の象徴であったマルクを捨て、ユーロを導入することは大きな賭けでもあった。ユーロ導入をめぐる賛否両論もあったが、今では、子どもたちも算数の教科書で、具体的にユーロを使った計算の練習をするようになった。ユーロ紙幣や

硬貨の絵が描かれた教科書の該当部分は、ある意味でヨーロッパ統合の象徴的な部分とも言える¹⁷⁾。

③歴史 (*Zeitreise 3 Differenzierende Ausgabe Geschichte/Politik*)

戦後のドイツは「過去の克服」に真摯に向き合ってきた。ドイツがヨーロッパ統合の歩みの中で重要な役割を担うことが可能になったのは、近隣諸国からの信頼を取り戻すための努力があったからである¹⁸⁾。たとえば、ブランド元西ドイツ首相 (Willy Brandt: 1913-1992 (首相在位1969-1974)) は、ワルシャワ・ゲットー碑の前に跪き、全身で謝罪の気持ちを表した。これはドイツの「過去の克服」の象徴的な場面の一つとされている。政治家たちが誠意をもって謝罪を続ける一方で、教育の場では、ドイツの負の歴史をしっかりと教える努力がされている。先にも述べたように、次世代に歴史をどう語り継ぐかが重要課題となっている。

その一方で、ドイツの歴史教育にも盲点があった。それは、いわゆる「普通のドイツ人」がナチの時代にどのような犯罪行為を行なったかに関して、終戦直後はあまり語られなかったことである¹⁹⁾。ホロコーストはドイツ人すべてに関わる出来事であったということが明らかになり、「見て見ぬふりをする」ことに対しても一定の責任を問われるようになった経緯があった。歴史教育においても「普通のドイツ人」の責任が問われるようになったのは1960年代以降のことである。様々な課題はあるが、ドイツの歴史教育に対する姿勢からは学ぶべきことが多いのは事実である²⁰⁾。

教科書展では、「普通のドイツ人」の責任を問うことについて記述された部分、歴史的事実も立場が異なると捉え方も様々であることを考えさせられる部分を紹介した²¹⁾。

たとえば、次のような記述がある。

ユダヤ人の絶滅は、町や自治体の中で始まった。彼らの強制的な移送も、まさに白昼のもと行われた。ユダヤ人は町の中心に集められ、荷物をもって駅まで行進させられた。これらは白昼のもと、公の場で行われた。これを見ていたドイツ人は何を考えていたのだろうか？

(*Zeitreise 3*, 40頁、筆者訳)

こうした記述の後、「戦後、多くのドイツ人の、彼らは何も知らなかったという主張を判定しなさい」(同上書、41頁)という課題が挙げられている。子どもたちに、自分の頭で考えさせようとしている。

④歴史 (*Spotlight on history*)

外国語を通して歴史を学ぶことで、複眼的思考力を身につけようとする試みがある。ドイツをはじめヨーロッパでは、主に社会科の学習と外国語学習を統合した教育が試みられている²²⁾。この教育方法は、CLIL (Content and Language Integrated Learning) (日本語では、「内容言語統合型学習」とも言う)と呼ばれている。内容と言語の両方を学ぶことができるこの方法で、発信力を身につけさせようとする。

たとえば、英語で書かれた歴史教科書では、1938年11月9日のポグロム (「帝国水晶の夜 (Reichskristallnacht)」) が「Night of the Broken Glass」と表現されている²³⁾。

こうした記述のあと、「イスラエルの人とこの事件について話をしていると想像しなさい。あなたはどの表現を使いますか。それはなぜですか」(*Spotlight on History*, 59頁)という課題が挙げられている。

このような教科書から、歴史的事件の呼び方も言語によって異なっているということを知り、ものごとを相対的に考える力を身につけることができる。ドイツのCLILは、平和構築にむけた相互理解を目的とするところか

らはじまったと考えてよいだろう。

4. おわりに—グローバル・スタディーズに関する研究教育活動との関わり

「世界の教科書展」の会場に展示された教科書やパネル解説から、来場者同士で情報交換ができる。そこから異なる言語や文化への関心が芽生えていくことを望んでいる。ひいてはその関心をさらに深めることで、グローバル・スタディーズという研究領域に結びついていく。個々の現場で経験値を積み、それを他者と共有することで、よりグローバルな理解が進むからである。ドイツの教科書の特集した2016年度の教科書展では、日本と同じ敗戦という苦い記憶をもつ国の教育と日本の教育を比較し、新たな視点を模索した。

グローバル化した21世紀、移民・難民の増加により、異言語・異文化が激しく混交している。こうした状況において、移民・難民が移住先で生活基盤を構築すること、および彼らの言語学習が最優先事項となっている。難民の受け入れにあたっては、近年ドイツの動向が注目されている。特に、受入れ後の難民のドイツ語教育に関しては試行錯誤の状況が報告されている。ドイツは難民受け入れに先駆性を示し、現在はその岐路に立たされている。教科書展が、学校教育現場における現状を概観し、日本の教育が参考にできる点を検討するひとつの契機となれば、企画側の目的の一つが達せられることになる。

ドイツと日本は、交流の歴史も長く、2011年には日独交流150周年を迎えた。日常生活の様々な場面で、音楽や洋菓子等、日独交流に縁あるものを見つけることができる。日本との技術・経済交流も活発に行われている。音楽、食文化、教育制度などの文化、教育面では互いに影響を与え合っている。産業や経済においても積極的な交流がおこなわれており、教育面でも影響をうけあってきた。それぞれの国における教育の歩みは異なるが、戦

後から70数年を経過した現代に生きる私たちにとって、ドイツの教育と日本の教育を比較することで、両国の歩みを振り返ることは重要である。引き続き考察を深め、外国語教育にまつわるイデオロギー的な諸問題を含め、教科書に関連づけて論じていきたい。

-
- 1) 2017年度の教科書展でラオスの教科書を展示した際は、パネルで解説するとともに、公開レクチャーでも写真を紹介しながら説明がなされた。
 - 2) 教科書展の詳細は、教育研究所HPに掲載されている (<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/>)。教育研究所が収集・保管する世界の教科書は、約1万冊に達する見込みである。
 - 3) 筆者は、2016年度の「第23回世界の教科書展〈特集〉ドイツの教科書」にコーディネーターとして参加し、教科書収集、翻訳、展示パネルの解説原稿作成、レクチャーを担当させていただいた。来場者の反応から、展示のどの点に関心が持たれやすいかを把握でき、今後の調査・研究に向けて多くのものを得ることができた。紙幅の都合で一人ひとりのお名前を挙げるができないが、文教大学教育研究所スタッフ、学生アルバイトの方たち、関係する全ての方たちに感謝申し上げます。
2017年度からは、教育研究所研究部主任として、筆者も教科書展の業務に携わっている。
 - 4) 「第9回世界の教科書展〈特集〉歴史の教科書」の詳細も教育研究所HPに掲載されている。
 - 5) 学園祭終了後に開催される学外巡回展に関しては、稿を改めて論じたい。新しい取り組みであり、今後進めていく中で課題も明確になる、再度論じるべき価値の

- あるものと考えられるからである。
- 6) 「OKEGAWA honプラス」は、「次世代の知の広場」を目指す文化交流施設である。桶川市第五次総合振興計画に基づいている。先進的な試みとして、図書館、書店、カフェ、イベントスペースが併設されている。近隣の施設、学校等と連携し、学びのプログラムを通して、市民に新たな出会い、気づきを誘発することを目的としている。
 - 7) 山川智子 (2019) 『『複言語・複文化主義』のさらなる可能性を考える—ドイツ語教育の射程を広げるために—』日本独文学会ドイツ語教育部会『ドイツ語教育23』28-29頁。
 - 8) 翻訳をのぞくパネル原稿の全文は、教育研究所HPに掲載されている。
<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/> (2019年9月30日閲覧)
 - 9) 国立教育政策研究所HP
<http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> (2019年9月30日閲覧)
 - 10) マックスプランク教育研究所研究者グループ (1994) 天野正治・長島啓記・木戸裕翻訳 (2006) 『ドイツの教育のすべて』東信堂。木戸裕 (2012) 『ドイツ統一・EU統合とグローバリズム—教育の視点からみたその軌跡と課題』東信堂。
 - 11) 木村護郎クリストフ (2005) 「隔てる国境からつなぐ国境へ—ドイツ東部国境地域における言語環境構築の諸相」宮島喬『西欧諸国における地域分権・地域主義の動向とその社会・文化的影響』平成15-16年度科学研究費補助金・基盤研究B (1) 海外学術調査・研究成果報告書、立教大学社会学部、101-123頁。Bausch, K.R., Christ, H., Krumm, H.J. (Hg.) (1995) Handbuch Fremdsprachenunterricht (3. Aufl.), Tübingen und Basel: A. Francke Verlag.
 - 12) 初等教育は、ドイツのほとんどの州で4年間の「基礎学校」での教育が設けられているが、ベルリン州とブランデンブルク州では、6年間の「基礎学校」教育期間として設けている。教育制度に関しては、木戸、同上書参照。
 - 13) 学年は中等教育以降も、初等教育からの年数で数えられる。
 - 14) ノルトライン＝ヴェストファーレン州の文部省 (Ministerium für Schule und Bildung des Landes Nordrhein-Westfalen) HP
<https://www.schulministerium.nrw.de/docs/Schulpolitik/G8-G9/> (2019年9月30日閲覧)
 - 15) 「ドイツの大学システムの概要」DAAD (ドイツ学術交流会)
<http://tokyo.daad.de/wp/ueberblick-hochschulsystem/> (2019年9月30日閲覧)
 - 16) *deutsch.punkt 1. Differenzierende Ausgabe: Schülerbuch Klasse 5*, Klett, S. 10-11, 14-15, 18-19. 三森ゆりか (2003) 『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社。
 - 17) *Super M Mathematik für alle 1. Cornelsen Verlag*, S. 58-59, 60-61, 90-91.
 - 18) 石田勇治 (2005) 『20世紀ドイツ史』白水社。
 - 19) 川喜田敦子 (2005) 『ドイツの歴史教育』白水社。
 - 20) 筆者はかつて、ヨーロッパの言語教育政策における「複言語・複文化主義」という考え方とドイツの歴史教育を、以下の論文で関係づけたことがある。山川智子 (2015) 『『複言語・複文化主義』とドイツにおける『ヨーロッパ教育』—『記憶文化』との関りの中で』文教大学文学部『文学部紀要』29/1, 59-76頁。

21) *Zeitreise 3 Differenzierende Ausgabe Geschichte/Politik*, Klett.

22) 世界の外国語教育事情に関しては、以下の文献を参考にした。大谷泰照、杉谷眞佐子、橋内武、林桂子（編著）（2015）『国際的にみた外国語教員の養成』東信堂。森住衛・古石篤子・杉谷眞佐子・長谷川由紀子（編著）（2016）『外国語教育は英語だけでいいのかーグローバル社会は多言語だ！』くろしお出版。

23) *Spotlight on History, Volume2*, Cornelsen Verlag. さらに、若者の歴史認識に関しては、次の論文を参考にした。

杉谷眞佐子（2016）「戦争の語りと現代若者の戦争観に関する研究（2）グローバル時代を生きる青少年の歴史認識：フランクフルト市の高校生の調査から」『関西大学人権問題研究室紀要』72、47-130頁。

本稿でとりあげた例の他、一つの歴史的事件に対して複数の見方が存在すること、および複眼的思考力の育成に関しては、杉谷眞佐子先生（関西大学名誉教授）から多くの示唆を得た。

付属資料

1. 2016年度・学園祭での「世界の教科書展」のポスター



2. 2016年度・学園祭での「世界の教科書展」の会場写真



3. 2016年度・学外巡回展のポスター



4. 2016年度・学外巡回展の会場写真

